

鏡はよく、物語の中で不思議なモチーフとして登場する。ルイス・キャロルによる『鏡の国のアリス』では、アリスは鏡をくぐり抜け異世界へ迷い込み、「・ズ・ローリングによって書かれた『ハリー・ポッターと賢者の石』の中では、鏡を見る者の心の奥にある一番強い望みを見せてくれる鏡を通して、ハリーは亡くなつた両親を見に毎日鏡と向き合う。この作品の主人公「僕」も、鏡を通して不思議な体験をしている。

物語は、「僕」が彼の家で来客とともにこれら始まる。一九六〇年代末、主人公の「僕」は新潟県の中学校で夜警の仕事をする。夜の学校は当時の「僕」にとって怖いものではなかつた。眞面目な「僕」は、両手に懐中電灯と剣道の竹刀を持って、全ての教室が施錠されているか確認して回つていた。しかし、ある日の夜はいつもと様子が違つていていた。なんとなくベッドから起き上がりたくない。それでも仕事だからと巡回をしていると、廊下の壁にいつもの大きな鏡がある。まるで「僕」を支配するかのよう鏡に映る僕に危害を加えられるそろになった彼は、持つて竹刀で鏡をたたき割る。しかし、翌朝見るとそこには鏡の破片はなく、自分が吸つた煙草の吸い殻と、持つて竹刀が落ちていただけだった。

この作品は、「僕」が来客に向けて体験談を話す一人称によつて物語が進んでいく。彼が鏡と出会うシーンの中で、「僕」はこう話している。「煙草を三回くらい吹

かしたあとで、奇妙なことに気がついた。鏡の中の僕は僕ではなかつたのだ。」本格的で思つたが死ぬ日付は、七日後です。」と、突如現れた死神に余命宣告された主人公の渚は、自暴自棄になり自殺を図るが、死が思いを寄せる相手である。渚は残された七日間という短い時間の中で、彼は昔の彼女の笑顔を取り戻そうとする。

この本を読んで一番印象に残つたのは、渚が人生の最後の日、七日間の朝食を家族とともに取るシーンだ。これまで渚は、何とかしらの理由をつけて家族と過ごす時間を一つも見つけることができなかつた。自殺願望もないし、体もそこまで弱くない、渚が人生の最後の日、七日間の朝食を家族とともに取るシーンだ。これまで渚は、何とかしらの理由をつけて家族と過ごす時間を一つも見つけることができなかつた。渚は、人生の大切にしてこなかつたが、いざ死ぬといふことが分かつた時に、一番身近にいてくれた家族に感謝を伝えた。私はこの場面から、いつも通りに過ごしていたら気が付かない、日常にありふれていることがあるのだと実感した。もし渚と同じように母親が

もし私が七日後に死ぬとしたら、私は何を考え、行動するのだろうか。まずは親戚回りか、それとも全財産を使って沖縄旅行か。どれもパツとしない、わざわざ死ぬ前にやることではないなど我ながら呆れてしまつた。

何の本を読もうかと本屋で探していたら、流星群とかわいらしく少女が立つていて表紙を見つけ、思わず手に取つた。

「あなたが死ぬ日付は、七日後です。」と、突如現れた死神に余命宣告された主人公の渚は、自暴自棄になり自殺を図るが、死が思いを寄せる相手である。渚は残された七日間という短い時間の中で、彼は昔の彼女の笑顔を取り戻そうとする。

私は最後までこの本の主人公との共通点を一つも見つけることができなかつた。自分が人生の最後の日、七日間の朝食を家族とともに取るシーンだ。これまで渚は、何とかしらの理由をつけて家族と過ごす時間を一つも見つけることができなかつた。渚は、人生の大切にしてこなかつたが、いざ死ぬといふことが分かつた時に、一番身近にいてくれた家族に感謝を伝えた。私はこの場面から、いつも通りに過ごしていたら気が付かない、日常にありふれていることがあるのだと実感した。もし渚と同じように母親が

「七日間の命」

優秀応募作品 対象図書『明日の君がきっと泣くから』 葦永青著

1M1 松木穂奈美

「七日間の命」

優秀応募作品 対象図書『明日の君がきっと泣くから』 葦永青著